

Next Stage 3 エダヒロ記

若い子たちはスケートボードが大好きだ。歩道も身障者用スロープも、この子たちの目には、「スケボーにピッタリ！」と映る。ランドルフの町では、とりわけ商店街の歩道がスケボーにうってつけの場所なのだった。丘に立つ町なので、何もしなくても、歩道の勾配がスケボー少年たちにおあつらえむきなのだ。町では、さらに新しい歩道やスロープといった歩行者のための設備を作ったのだが、これがまたスケボーにうってつけ。若い子たちは思う存分楽しんでいて、スケボーの楽しさは、「見てもらえる喜び」でもあるのだが、商店街のど真ん中なら、たまたまそこにいる人たちがギャラリーになってくれるわけで、願ったりかなったりなのだ。

ところが、万事順調というわけにはいかなかった。商店街を歩くお年寄りの身になってみたら、店から出てきた途端、歩道で繰り広げられている曲芸のごときパフォーマンスの真ん中に放り込まれるようなものであって、「骨折覚悟、命がけの買い物なんてまっぴらごめん」である。店主たちも口々に苦情を言うようになった。さらに悪いことに、せっかくお金をかけて作った真新しい歩道なのに、スケートボードの車輪があちらでもこちらでもガリガリと跡を残すものだから、町としては、真新しい社会基盤整備計画がうまくいかなくなるおそれが出てきた。

「なんとかしてくれ！」という住民や企業からの苦情と、町の財産に多額の損害が出てしまうという危機感から、町の行政委員会が行動を起こした。すぐさま、「町のすべての歩道でスケートボードは禁止」という条例を通したのだ。かくして、違反すると、交通違反のように切符を切られることになってしまった。

スケボー少年たちも黙ってはいなかった。同情してくれる何人かの大人たちの助けを借りて、「それじゃ、ぼくらが公共の施設を使う権利が侵害される」と立ち上がった。団結して条例の修正を求める嘆願活動をおこなったのである。結局のところ、町が気にしているのは商店街のあたりだろ？　なんだって町じゅうの歩道でスケートボードを禁止しなくちゃいけないんだ？　それに、もし町がこういうレクリエーションへの関心を支持しようという気があるんだったら、スケートボード場を作ってくれるというのも一案だと思わないかい、と。

若者たちとの話し合いを重ねた結果、行政委員会は条例の修正を可決し、商店街の歩道のみスケートボード禁止となった。そののち、町はスケートボード場を建設。1998年のオープン以来、大人気のスポットとなっている。

この例から、さまざまなニーズと地域社会の当事者のすべてがよくわかるだろう。ことの発端は、レクリエーションを楽しみたい！　という要望だった。スケートボードをしたと思った若者たちがいたのだ。ボードに乗っていたら、肩の力も抜けて元気も出るのさ。それに楽しいし、というわけだ。私たちはだれしも、遊ぶ時間や人生を楽しむ時間を持ちたいと思うものだが、子どもであればなおさらのこと。というわけで、そう思った若者たちは、商店街を自分たちの遊び場にして、遊びたい気持ちを満たそうとしたのだ。ところが、この行動は、町の住民やお店との間に軋轢を生むことになる。年配の人たちは、

安心して歩道を歩けなくては困るのだ。歩道を歩くたびにヒヤヒヤするようでは、商店街にやってこなくなる。そうしたら、店主はお客さんを失ってしまう。そこで、そう思った住民やいくつかの商店は、この問題をどうにかしてほしいと町にかけあった。そこで今度は町が行動を起こし、若い子たちがほかの人々に迷惑をかけたり危険を与えかねないやり方で自分たちのニーズを満たす活動を制限したのだった。個人の行動が、組織の反応を呼び起こし、そこから個人の行動を規制する自治体の行動が出て——当初の行動がいまやぐるりと一巡して戻ってきたのだった。地域の当事者すべてが、それぞれの方法でその状況に関与している。